

追手門学院大学創立50周年記念事業
地域支援心理研究センター分室附属心の相談室分室開設記念シンポジウム
2016年3月2日(水)

基調講演「孤立・無縁を生き抜く」

講師：相愛大学 人文学部教授、NPO法人リライフ代表
積 徹宗

過分なご紹介をいただきまして恐縮です。積と申します、よろしくお願ひいたします。今日は、孤立・無縁社会を生き抜くというテーマをいただいております。われわれの社会は、どうも次のフェーズに入ったらしい。だから若年層から高齢者に至るまで、どういうふうな方向に進んでいたらいいんだろう、といった漠然とした不安を感じている。あるいは何らかのヒントを求めている方は少なくないようです。今日のお話が、皆さんの感じておられることとうまくかみ合うかどうかは分かりませんが、NPOの運営や若者の居場所づくりに関わったりしている私の目から見たところをお話しさせていただこうと思います。A4のお手元資料を配布させていただきました。現状というところ見ていただきますと、少子高齢化や経済低成長期などがあります。これは皆さんも実感されていることかと思ひます。WHOの定義によれば、65歳以上がその社会の7%に達すると高齢化社会、14%から高齢化じゃなくて高齢社会となります。そして21%を超えると「超高齢社会」です。今や日本の社会は26%を超えています。また、今の30歳前後より下の世代は、1度も高度成長期を経験したことがありません。そもそも低成長が前提となっています。そういう社会になっているんですね。当然、手厚い社会保障はだんだん難しくなってくる、社会のサイズは小さくなっていく。ここ数十年

のうちに8,000万人ぐらいの国になるだろうというふうに言われてるんですね。もしかすると予想よりも早く、その状況に達するかもしれません。江戸世代が、3,000万人ぐらいの社会ですので、ある意味ものすごい短期間で膨れ上がったことは確かだったんですね。これはこれでちょっと無理がありました。だからダウンサイジングしていくっていうのは、そんなに悪いことばかりじゃないというふうに私は思っております。少なくとも、われわれの社会もわれわれと同様、加齢を重ねていきますので、もうすでに成長期を終えて成熟期に入った社会ということは間違いなさそうです。というのは、世界を見渡してみてもだいたい成長期を終えて成熟期に入った社会って、同じような悩みを抱えてるんですね。どこも少子高齢化で悩んでますし、鬱病の増加とか、自殺率は上昇とか、出生率の低下とか、離婚率の上昇とか、だいたい同じような問題を抱えている。これを近代成熟期の社会と呼びます。そうすると成長期とはやっぱり方向性や社会のテーマがちょっと違うんですね。成長期と同じような感覚で、運営しようとしてもうまくいかない。価値観や感性も変わってきていると思ひますね。たまに私のところに、『an・am』とかから取材来るんですよ。どう思います？こんなおっちゃんに、どうなってんのって感じですよ。なぜかと言え、もう今は「これがトレンドです」と、読

者の購買力をがんがん煽って引っ張っていくようなやり方だと若い人がついてこないらしいんですよ。なにしろ、もう、生まれたときから低成長期なんですから。あるものをうまく使って日常を楽しむとか、うまくシェアをして暮らすっていう、こういう特集をときどきやらないと若い読者が増えていかないっていうんですよ。つまりそれだけ、感性や求めるものが変わってきてるわけです。考えてみたら、成長期の最後の打ち上げ花火がバブル期だったかもしれないですね。あの時期はちょっと変でしたよね。相当無理もあったかもしれないですね。そんななわけで、社会のテーマが、「できるだけ持続可能性の高い社会」とか、「循環型社会」とか「定常」などへと移行しています。

考えてみたら成長期にね、ずいぶん無茶なことやりました。もう、万博みたいですね、バーンとお祭り騒ぎをして、もうあとは野となれ山となれの的、そんなこともありましたね。やっぱり若いときはすごくアクティブですからね。ハイパーアクティブな社会だったときもあったんです。しかし、資源は限られてますし、特定のどっかのパートだけが急に成長するっていうことはあっても、社会全体が右肩上がりで急速に伸びるっていうことはもうちょっと考えられない。そうすると、あるものをうまく循環させていたり、分かち合ったりして暮らすっていう、そちらのほうに切り替わりつつある。そのことをときどき実感するんですね。例えば皆さんご存知ですか、今の30前後ぐらい下を「さとり世代」と言うんですよ。ほら、世代論っていっぱいありますよね、例えば「団塊の世代」とか。われわれのときは、「しらけ世代」とってよく言われたんですけど。それってだいたい評論家とか文化人が名付けるんですよ。ところが、この「さとり世代」だけは自ら名乗りだしたんですよ。ネットの掲示板で、「俺たちをゆとり世代などと言わないでくれ、俺た

ちはあんたたちが欲しいようなものは別に欲しくないんだ」って言うんですよ。確かに、私は長年大学の教員してますけども、かつては大学生が長期ローンを組んで、ものすごい高級外車に乗ったりとか、高級バッグを持ってる女子学生とかいたんですけども、そんなの絶滅しました。もう今の大学生は貧乏臭いですよ。女の子でもジャージで学校来たりとかするんですから。電車賃も惜しんで暮らしてるんですよ。本当に苦しいです、今の大学生。大学卒業したら奨学金を返還しなきゃいけないし。卒業時に200万くらい借金あるんですよ。ひどい国でしょ。先進国と言えない。とにかく、質素に暮らしています。彼らは別に悟ってるわけじゃないですよ。上の世代と求めているものが違うだけです。欲望がないわけじゃないけども、欲しいものが違う。それで自分たちでネットで、俺たちは「さとり世代」なんだっていうようなことを言い出しました。これは上の世代から見ると、ものすごい年寄り臭く見えるらしいですよ。「なんだあの覇気のなさは、若いのに」「若かったらもっとがんがん意欲を出して、上を目指して競争していくべきなんじゃないのか」など感じるようです。なにしろ、若い人たちが、薄い感じなんですよ。がつがつしていない(笑)。じゃあ欲望がないかというところじゃなくて、求めているものが上の世代とは違う。これらは、どうも無意識的な成熟社会への適応っていう感じがするんですよ。どこかでそういう適応が始まっているんじゃないかな。

それと現在には、やっぱりちょっと富が偏在してますよね。貯蓄の大半が上の世代に偏ってる。あるいは、グローバル企業が全部かささらっていくとか。グローバル企業なんか、どこで儲けてもどこで使ってもいいんですよ、企業さえ儲かったらええわけですよ。日本の国が良くなるだろうがどうなるだろうが、どちらでもいいんですよ。日本人の雇用とかどうでもいい。要するに企業が全部かささらっ

ていくみたいなことになってるでしょ。そうやってがんがんバトルして、打ち負かしていくのがグローバルなフィールドです。そういうことをできる若い人もいますし、そういうことに喜びを見いだす若者もいるんですけども。ただ、そこに乗れる人ばかりじゃないんですよね。その文脈には乗れないっていう人がずいぶん出てきたと思います。ニートってそうですよ。ニートって「その文脈にはもう乗れません」という人たちは少なくないです。そのストーリーから降りていってる若い人もいます。これはこれで成熟期ならではの面白い動きだと思います。たとえば、大正9年に行った国勢調査では、日本人の職種が3万5,000ぐらいだったんですよ。ところが、最近、厚労省が発表した日本の職種は、2,000ぐらい。昔の方が職業が多様なんですね。いろんなことして暮らしていたんですよ。ところが現在はほとんどの人が、企業に勤めて、それで日常のすべてを捧げるみたいなことになってしまっている。こういう社会は人類史上初でしょう。ものすごくストレスフルな社会です。非正規雇用の方は非正規雇用の方のしんどさがありますし正規雇用は正規雇用でとことん使われる。若者の就業状態はすごく悪化している。大学卒業したばかりの女性でも、毎日帰りが11時、12時になるような本当にひどい使われ方をしてるんですよ。とにかく、どうもこういった文脈に乗れない人たちがいて、いろんなことをして暮らしているんですよ。今日はご紹介できませんが。ぜひそういった若者にも目を向けてあげてください。私は彼らを何とか上の世代とつながりたいって思ってるんですよ。やりたいことがあっても応援してくれる人がなかなか見つかりませんので。いろんなことをやろうとしてる世代と、上の世代とをつなげる活動を応援しています。たとえばですね、家業リノベーションというのやってる人がいるんですよ。ある畳屋さんがお店を閉めることになった。

跡継がないからです。もう年だからやめようと言われていた。このお店と、職人さんみたいな仕事に就きたい若者をつなげる。起業するだけの力も資金もないけどもやる気はある。もう既に顧客も機械も場所ももっている畳屋さんをつなげれば、すぐに始めることができる。そんなちょっとした結び付きで新しい扉が開いたりします。

最近面白い人と会いまして、伊藤洋志さんっていう若者なんですけど、「ナリワイをつくる」ことを提案しています。面白い子です。彼は京都大学を出て、一流企業に就職したんですけども、どうも精神的におかしくなったらしくて。毎晩、こんな大きなハーゲンダッツのアイスクリーム全部食べないと寝れないっていう、非常にいびつな状態になったそうです。今日は食べないでおこうと思って布団入っても、どうしても辛抱できなくて、パジャマのまま買いに行ってしまう。これは何かおかしいと感じたみたいで、働き方を変える決心をする。そして「ナリワイをつくる」をやりだしたんですね。たとえば、和歌山県の農家で「梅の収穫のときだけ人手がいるんで手伝ってくれ」というところがあると、ネットで「梅の収穫手伝える人」と募集する。結構集まるそうです。ついでに梅酒漬けたい人とか、梅欲しいっていう人も集まる。これ、梅の収穫の時期だけのナリワイなんですよ。そんな調子でいろんなことに首をつっこんでいく。解体作業をするとか、土窯のパンを焼いたりとか。昔、土窯でパンを焼いてたパンの名人のおじさんとかいるらしいんですよ。そこに習いに行ったら、もう喜んで教えてくれたらしくて。パン屋の出し方から、申請の仕方まで全部教えてくれるそうです。蕎麦屋さんとなげたり、いろんな人となげたりして、月に2つ3つナリワイがあると、やっていけるみたいなんです。東京でオフィス構えてるんですよ。シェアオフィスなんですけども。オフィスもシェアして使えば、

わずかな資金でみんなやっていけるらしくて。

企業で勤めていると、人生奉げて働いていても、自分のやってる仕事はどう社会とどうつながってるかが実感できない。それはひとつの苦しみのです。自分のやってる仕事と社会とのつながり感が実感できれば我慢できるのですが。何やってるか実感が無いってような、仕事を長時間するのは辛いのでしょう。だからリアルなナリワイを求める。家業リノベーションやる人がいたり、ナリワイを作る人がいたりとか、いろんな人とずいぶん出会ってきましたが、いずれも質素に暮らしていますね。それはそんなに苦じゃないそうです。むしろ、都心で暮らすために、何十年のローン抱えている。ローンを支払うために仕事を辞められなくて、身も心もズタズタになるよりは、質素でもいいから、実感のある生活をしたという道を選ぶ人も出てきている。これも、成熟社会だからこそ出てきた人たちという感じがするわけです。

われわれは本格的に始まる成熟期の社会を生きるための指針や価値について考える時期を迎えているようです。なんとなく現代社会はどんどん多様になってると思いこんできたけども、意外に1つのモデルにはまってるのかもしれないですね。なにしろこんな高齢化社会はかつてないわけですから。世界中どこにもモデルがない。われわれが切り開いていかなければならない。指針を模索しなければいけない。かつて、近世に入った大坂がそうでした。今までになかった商工業の層が、だあっと急激に膨れて、都市の大半を占めた。そんな社会、今までにないんで、どうやってわれわれ生きていったらいいのか、どの方向向いたらいいのか、どんな指針があるのかっていう事態に直面するんです。そこで大阪の人たちは皆、身銭切って学んだんですよ。懐徳堂作り、適塾作り、自主的に新しい指針を求めた。そういう気概がある地だったのです。

われわれも新しいフェーズに入った今の社会の方向性を少し考えていかなければならない。自ら足を運んで、何らかのヒントを手に入れる、学ぶというような態度が大事なんだろうと思います。今日のようなテーマで集まられる方はそういう感性の持ち主だろうというふうに思います。

さて、それではお手元の資料見てください。1番『若年世代の苦悩』というところをご覧ください。若年世代は若年世代特有の苦悩の傾向があります。とにかく現代の若い人たちは、傷つきたくないみたいです。だから、何よりも自分の気持ちが第1です。そのため、自分が尊重されそうにもない、あるいは高く評価されそうにもない場所には、最初から近づかないって感じなんです。そういう意味では、「自分の気持ち第一主義」という傾向があります。すごいリッチな暮らしよりも、貧しくてもいいから自分の気持ちが大事ってような、そんな感じがします。そうになると、何に苦しむか。人間関係に苦しみます。自分の気持ちをいつもいい感じでキープできる人間関係ってというのはめったにありませんので、基本的には人間関係に苦しまなければいけない。また、いまだに政治・経済のリーダーたちは成長モデルで社会を動かそうとしてるわけですから、これはなかなかうまくいかない。若年世代の苦悩ですよ。

さらには、さまざまな場合で自己決定、自己表現が求められる、そういう社会に生きるしんどさがあります。これについては、後半のところでも問題になりますので、少し覚えておいてください。常に自己表明、自己表現を求められる社会ってきついですよね。こういうしんどさが今の若年世代にはあります。ですから、「自分の気持ちが第1」でしょ、「自己表現、自己決定しなきゃいけない」でしょ、これはもう必然的に自己のイメージと他者評価がずれますよね。このズレでまた苦しまなきゃいけない。若い人を見てるとやっ

ぱり他者評価で苦しんでいます。自分もつ自己イメージと、周りの評価とが一致しないんですよ。そら一致しないですよ、普通一致しません。でも自分の気持ち第一主義の人は、これで苦しむことになります。そういう意味では、今ほど若い人が人間関係に苦しんでいるっていう社会も、珍しいんじゃないかと思うぐらいです。

また、今の社会はどんどんバーチャルで対応できる部分が増える一方です。そのため、「身体性」という問題が出てきました。現代社会はどうしても身体性が枯れる傾向にあります。これについて考えなきゃいけない。われわれは身体の知性が枯れていく一方です。頭の知性は、とても発達してるかもしれませんが、体の賢さが低下している。そこで「事例」を見てください。私、お寺の裏の空き家を使って、認知症の方のグループホームを運営しています。ここでも身体性をテーマにしているんですよ。昔の日本家屋なんで、すごく不便なんです。段差だらけですし、夏は暑くて、冬は寒い。ですから、皆で工夫して暮らしてる。にとっても、身体にそなわった習慣や知性は頼りになります。最新の施設に行きますと、部屋入ったら電気ついて、部屋出たら電気消えて、手出したら水出て、手引っ込んだら水止まって、バリアフリーで、おトイレ入ったら蓋がびゅうんって開くとでも便利ですが、そんなところで暮らしてたら、蛇口をひねる能力自体なくなっていくでしょ。足なんかすぐ上がらなくなるんですから。それは認知症の方だけの話じゃないです。われわれの社会って、身体性低くても暮らせるようにどんどんなっている。同時に身体の感性や知性は低下している。人間ってというのはややこしいですね。便利で楽になったら今度は身体の知性が落ちるみたいなことが起こるんですから。

身体の知性を上げるにはどうすればいいでしょうか。注目すべき点は、文化ですよ。文

化って不合理でしょう。この不合理なものが重要なんです。文明ってというのは、基本的には合理的にできているんですよ。だから文明って、国を越え、民族を越えて拡大してきます。合理的にできていますから。一方、文化は不合理です。理屈に合わないんですよ。だから一定の範囲以上広がらないんですよ。たとえば、昔の人って、家の敷居踏んじゃ駄目だとか、畳のへり踏んだら駄目だとか、そんなこと気にして暮らしてたんですよ。踏んだからどうなるのって言われても、どうもならないんですよ（笑）。文化って不合理だからです。理屈じゃなくて、様式が先行する。こういうものって、身体の知性に直結してたりします。

私の友人に、安田登先生という能楽師がいらっしゃいます。安田先生のワークショップとか、ものすごく面白いですから。機会があれば行ってみてください。この人が引きこもりの人ばかり集めて、『奥の細道』と同じルート歩きながら俳句作るっていう活動を続けておられるんですよ。引きこもりの子とか集めたら、みんなリュックいっぱい薬持ってくるらしいんですよ。ものすごい不安で外出たら怖いから、薬持たないと辛抱できないんですよ。いっぱい薬持って出発するんですけど、毎回、ほとんど全員が、薬1度も飲むことなく終わるらしい。みんなで一緒に何日も歩いて俳句作る。俳句作ろうとしたら、周りのことをいろいろ観察しなきゃいけないじゃないですか。言葉を削いで削いで残るものを選ぶっていうような作業をしながら、ときには船に乗って松島まで行ったりするんですけど。これもやっぱり、バーチャルな日常を生きがちな人に身体性を与える取り組みですね。そんなことで、身体性や文化に現代人が考えるべきポイントがあると思います。お寺の裏でやってる認知症の方の家って、文化を重視しながら運営してるんです。不合理なことばかり。

また、私、事例2で書いてありますように、「内在の時間を延ばす」というのが、現代人のテーマだと考えています。こんな話したら、全然、時間なくなってしまう。すいません、ちょっと待ってくださいよ。ええとです、いけるところまでいきます。現代社会は、移動する時間はとても早くなっていますし、家電製品などにより昔だと時間がかかったものを短時間でできるようになっています。そしたら、現代人は昔の人よりもずっと時間が余ってて然るべきじゃないですか。ところが、現代人のほうがずっと忙しいです。昔の人の日常生活を調べてみると、けっこうのんびりしてるんです。日が暮れたら仕事をやめたりとか。お芝居なんかを、観るのも、一日かけている。娯楽ものんびりしていた。今、知人のお通夜もお葬式も全部出席する人ってあんまりいないのでは？かなり近い人でも、お通夜が精一杯。なにしろ現代人は忙しいですから。会社休んでまで、知人の葬式行けなかったりしますよね。昔だと2日も3日もお通夜するようなこともありましたからね。

なぜ時間が余って然るべきの現代人がこんなに忙しいのか。いくら外の時間短くしても、自分の内在の時間が委縮してると、忙しいんですよ。収縮した時間の中で生きてると、ちょっとしたこともイライラして切れやすいついていうようなことになります。内在してる時間をどうやって延ばすかは、現代人のテーマとしてある。いじめ問題でも似たようなところがあります。私の知人の九州の高校の先生が、生徒さんを連れて、助産師さんのところの実習へいく活動を続けています。助産師さんのレクチャーを受けて、現場をお手伝いする。そうしたら、いじめが目に見えて少なくなったんですって。現場に身をおいていると、時には残念ながら誕生できなかった命だって目の当たりにするわけですよね。「ああ、みんな、こうやって望まれて生まれてきたんだ」ということを実感する。そした

ら、他者と私との時間がちょっと延びるんですよね。学校でしか顔を見ないと時間って収縮します。会社での人間関係とか、かなり縮んだ時間ですよね。ちょっとしたことも辛抱できない。これを延ばすために、その人のストーリー触れるとか、これまで歩んできた道に触れるっていうのは大きなことです。

以前、朝日新聞で、「いじめてる君へ、いじめられてる君へ、見ている君へ」というシリーズがあったんですよ。いろんな人がいじめに対して書いてたんですけど、最終回が春名風花ちゃん（通称：春風ちゃん）っていう、小学校6年生の女の子の文章でした。春風ちゃんて面白い子なんですよ。私、会ったことあるんですけどね。タレント活動しているのですが、ネットで言いたいこと言う子なんです。それでもすごいバッシングをうけたりする。生意気だとか。すごくいいこと書いているのに。ものすごい非難受けて、警察沙汰にまでなってるんですよ。毎日、「死ね」とか「キモイ」とか言われ続けて。それで、その春風ちゃんが、いじめに対して、次のように書いたんです。「毎日、毎日こんなことを言われ続けてるけど、それでも、うちのお父さんとお母さんは、お前が生まれたときは宝物が生まれたように思ったし、今もそう思ってるって言う。だから、皆さんが毎日キモイとか汚いとか言っていじめているその子も、生まれたときは宝物のように思われて生まれてきたはずですよ。そこへ思いを向けてください」という文章でした。つまり他者のストーリーとうまくシンクロできると、内在の時間が延びるということです。そうすると立ち位置が変わってきます。

もしかするとこの中にも、家族が社会適応に苦しんでいる人がおられるかもしれません。苦しんでいる人に対して、なすすべもない時がありますよね。事情は人それぞれなので一概に言うことはできないのですが、なにしろ、この世の中ががらくたに見えるような時って

ありますからね。とにかくこの世の中も捨てたもんじゃないっていうふうに思ってもらうことが大切だと思うんです。そのためには、周囲の者は、いつもいろんなところにアンテナを張って、それをいいタイミングで提示してあげてことを考えていただきたい。苦労している人への観察を怠らない。そして、いいタイミングで提示。この辺りが大事だろうというふうにちょっと思ってるんです。

すいません急ぎます。それでは、2番の『高齢者世代』の苦悩っていうところをご覧ください。1973年辺りから、家で死ぬ人と病院で死ぬ人が逆転しました。昭和30年代は80%ぐらいが自宅で亡くなってたんですが、現在は80%を超える人が病院で亡くなります。1970年代に入れ替わったんですね。韓国がその15年後ぐらいに入れ替わります。台湾は10年くらい前に病院死が在宅死を上回りました。われわれは、病院で息を引き取る可能性が高いということです。そして、末期の医療に関して、自分の意思表明をしておかないと、望まない状態に長く置かれる可能性がある。人生の終末期においても自己決定が求められる。成熟期の社会とは、そういうことです。お互いの意思を尊重し合えば、自己決定しか落としどころがない。それに契約社会、訴訟社会ですからね。自己責任が求められます。成熟した社会ってこうなるんですよ。このしんどさが現代社会にはございます。2010年に終活っていうのが流行語大賞にノミネートされました。この2010年辺りが1つのエポックとなって、盛んに「自分の終末について、何らかの自己表明をしなきゃいけない」ということが取り沙汰される状況になってきたんですね。独居の増加もその要因です。地域によっては、もうすでに40%が独居ということになっているそうです。昭和30年代に、核家族という言葉がずいぶんもてはやされて、それまで大家族で暮らしていたのが、最小単位の構成となり、家族の形が変わった。家族

の形が変わるということは、社会が変わるということです。新しい社会形態になると、大騒ぎでした。しかし、もう核家族も成り立たなくなってきました。独居は増える一方です。高齢のご夫婦が、2人で暮らしてて、1人お亡くなりになる、その日から独居が始まる。そういう状況ですよ。アメリカ映画で「ザ・クリーナー」っていう、ちょっと変わった映画があって、あんまり映画としては良くないんですけど……。クリーナーっていうのは独居で亡くなった人の後始末をする仕事です。クリーナーをしている主人公が同窓会へ行く場合があります。同級生が「どんな仕事してるんだ」と訪ねると、独居で亡くなった人の後始末をしてるんだって言うんです。「発見されたときには、もうすっかりひどい状態で……」といった話を、延々とするものだから同級生がみんな引くんですよ（笑）。つまり心理的抵抗を感じて、クリーナーと距離をとろうとするムードなんです。ところが、話が終わったら、シーンとなって。しばらく間をおいた後、みんなが、「名刺もらえませんか」と言い出すんですよ。考えさせられる場所なんですよ。たとえば、離れて暮らしている自分の親になにかあったら、この人のお世話なるかもしれない。そんな状況が浮かびあがるわけです。

さて、いろいろ申しましたが今日のテーマであります『孤立、無縁社会を生き抜く』というような事態が、リアルになってまいりました。あのね、「無縁」っていうのは仏教用語なんですよ。実は仏教用語だと「無縁」って、理想なんですよ。「三縁」っていうのが、仏教にはありまして、「衆生縁」、「法縁」、「無縁」を指します。そして「三縁の慈悲」という教えがあります。まず「衆生縁の慈悲」は家族とか血縁関係がある人たちへの慈悲や利他行為です。これは比較的实践しやすいですよ。次の「法縁の慈悲」っていうのは、同じ仏教とであると、ご縁があった人

たちに関わったり、優しくできたり、その人のために動いたりするってことです。そして、「無縁の慈悲」は、縁もゆかりもない人に関わって助け合って暮らすっていう実践です。仏教の理想なんですよ。でもNHKの番組では、そういう意味じゃなくって、どんどん縁がなくなってる社会というふうに使いました。地縁や血縁が解体されていく社会をどう生きるか。高度成長期は職縁なんでもありました。かつて会社は村でしたから。そういうのもなくなっています。そして、独居が増える。この社会をいかに生きればいいのか。ひとつの提案として、あっちこっちのコミュニティーに、首突っ込んだり、足突っ込んだりする態度を養うことを挙げたいと思います。私、これを「コミュニティーの重所属」っていうふうに呼んでおります。あっちこっちのコミュニティーに関わっていく。しかも、できるだけ、成熟社会ならではの公正で（フェア）、ある物を分かち合う（シェア）コミュニティーに関わっていくのです。そこに成熟社会での市民の在り方があるんだろうと思うんですね。もし、身近にそれがなかなかなかったら、自分で作るっていうぐらいの、気概で行きましょう。フェア・アンド・シェアの場をできるだけたくさん作っていく。地域に、いろいろと生み出していくという、やり方ですね。

こういう事態を、私は仏教から学びました。仏教は最初期からフェア・アンド・シェアを説いています。仏教は縁起という立場に立ちます。縁起とはすべては関係性で成り立っているとする立場です。それを積極的に解釈しまして、あちこちに関係性をつないでいくことを「縁起の実践」などと呼んでおります。できるだけフェアで、そしてシェアするようなコミュニティーにどんどん関わったり首突っ込んだりして、いろんなコミュニティーに重所属する。趣味のコミュニティーもあるでしょうし、今日のような学びのコミュニ

ティーもあるかもしれません。私、昨日、医療関係の人たちによるノルディックウォークっていう活動に参加してきました。すごい面白い取り組みでしたよ。これなどもいいコミュニティーだと思いましたね。

よくよく目を凝らして、耳を澄ましてみると、意外なところに可能性のあるコミュニティーがあったりします。たとえば、私の友人の住職がこんなことやってるんですよ。大阪のミナミのど真ん中にあるお寺の住職なんで、多くの独居の人たちと関わっている。その人たちは、自分が死んでもあとあとの供養をしてくれる人もなく、お墓の面倒見る人もいない。自分のお墓ぐらひは欲しいけど、買ってもしゃあないって人がいたりする。そこで、その住職はお寺の余った敷地の細いところを使って生前個人墓っていうのを作ったんですよ。これがなかなかよくできててですね。こんな細長いところに芝生張りましてね。そこにちいさな墓石を好きなように置くスタイルのお墓にしたんですよ。生前個人墓「自然（じねん）」と言うそうです。このやり方だと、安いお金でお墓ができる。すごく喜ばれてる。しかも、このお墓を購入した人は、「自然」のグループに入るんですよ。「自然」の人たちは、しょっちゅう集まって、お坊さんの法話聞いたりとか飲み会したりとか旅行行ったりしている。私も呼ばれたことがあります。お彼岸とかお盆に、みんな法要を勤めている。みんなものすごい仲いいんです。こんな女性がいましたよ。「先生ちょっと聞いてください。私は結婚もせず、ずっと一人で生きてきたんですよ。この年になって初めて、本当の友達ができました」って言うんです。「自然」で本当の友達ができたんですよ。それで二人の墓石をくっつけてるらしい（笑）。見てみたら2つの墓石ピッタリとくっついている。そうやって地縁も血縁もない人が「お墓コミュニティーを作ってるんですよ。驚きましたね。もうけっこう年

月を経ているので、「自然」の人たちもだんだんもう亡くなっていかれてるんですよ。そして、「自然」の人たちが、ずっとお盆とかお彼岸とかおつとめしている。グループでずっと、後々の供養や勤行をしているわけです。仲良くしてたので、法要で泣いたりされてますよね。お墓だっって見方や取り組み方を変えれば新しいコミュニティが生まれる可能性があります。

さまざまなコミュニティに重所属する、そういう心と体を養う。そのためには、「自分というもの」のバリアを下ろさねばなりません。われわれ、普段は自分を守るためにバリア張って暮らしてるでしょ。それは必要なことなんですけど、ずっと張りっぱなしだと、心や体がさびてしまっって、シンクロしないんですよ。時にそのバリアを下ろして、他者と共振する、その場とシンクロするような、そういう心と体を養っていかないと、いろんなコミュニティに重所属するということにはなりません。そして、そういう心と体を育てていくために、ぜひ中景に注目してもらいたいと思います。私たちの身近な家族とか、友人っていうのは、近景ですよ。そして遠景は、グローバル社会とか国家とか、直接普段は感じないけど、自分たちが属してる遠い景色です。そしてその中間にあるのが中景です。代表的なものに地域があります。この部分が急速に枯れていってます。現代人のしんどさは、中景がダメになっているところにもあります。近景から直接遠景の問題に関わらなきゃいけない。そんな状況になってます。でもかつてのように地域を復活させるのはとても困難です。ですから、文化とかアートとか音楽とか芸能といった、こういうものを中景として豊かにしていくやり方があると思います。

「縁起の実践」でお話しましたように、いろんなコミュニティに自分をチューニングさせる心と体を養って、普段張ってるバリア

を下ろすことを考えていただければと思います。と同時にそのコミュニティにしがみつかないということも大事なんです（笑）。縁があれば関わり、縁がなくなったら離れる。これを仏教の言葉を使って、私は「空の実践」と呼んでおります。イメージは「縁起と実践」と「空の実践」の2本立てです。いろんなところに関わって、心をシンクロさせていくけど、そこにしがみつかない。縁がなくなれば離れていく。そういう心と態度の在りようは、私自身が仏教の教えから学んだことです。そして、成熟社会の心と体の在りようも、この辺りにあるんじゃないかっていうふうに思います。

仏教には現代人にとって多くのヒントがあります。実は、近代成熟期って、仏教はあまり活躍しなかったんですよ。近代成長期をぐいぐいと引っ張っていったのはキリスト教のプロテスタンティズムですよ。だって、アクティブに突っ走っているときに、「心と体を調べて……」とか言っても、誰も耳貸してくれなかった（笑）。でも成熟期になれば、仏教の持つ知見というのが結構宝の山だっっていうふうに私自身が思っております。もし機会があれば、そちらのほうにも目を向けていただければ。もちろん、仏教だけではなく、成熟期のコミュニティにはやっぱり宗教性っていうものがポイントです。成長期でずいぶん壊れた宗教性ですが、もう一度この辺りを考えていただければと思います。すいません、ちょっと時間がオーバーしてしまいました。今日の私のお話はこのぐらいにさせていただきます。お疲れさまでございました。